

# 『嵯峨のかよひぢ』考：藤原為家の涙

阿部，真弓

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要 / 日本文学誌要

(巻 / Volume)

89

(開始ページ / Start Page)

14

(終了ページ / End Page)

23

(発行年 / Year)

2014-03-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012289>

〈論文〉

## 『嵯峨のかよひぢ』考

— 藤原為家の涙 —

『嵯峨のかよひぢ』<sup>①</sup>は、天理図書館蔵本「飛鳥井雅有卿記事」に収められた作品四編のうちの一つで、飛鳥井雅有二十九歳、文永六年（一二六九）九月十三日から十一月二十八日の出来事が記されている。短い日記ではあるが、藤原為家から受けた『古今和歌集』『源氏物語』等の講義の有様が具に記録されていることから、他の三作品（『無名（仏道）の記』『もがみの河路』『みやぢのわかれ』）に比してはるかに注目度が高く、資料的な側面、また文芸的側面から研究が進められてきた。

雅有の仮名日記はそれぞれ日次記的な形式をとっているが、女性の仮名日記文学のように、文芸作品として構成が整えられていることが解明されており、そこに見られる虚構性の問題についても考究されてきた。<sup>②</sup>『嵯峨のかよひぢ』については「事実」をどの程度正確に記録しているかは計りかねるが、雅有は実体験の後さほど時を隔てず、文永七年（一二七〇）ごろ執筆したと考えられており、<sup>③</sup>記憶も未だ鮮明な時期に著述が進めら

れていたのだとすると、当時の御子左家の状況をリアルに伝えているのではないかと推測できる、興味深い文辞も散見される。その中で、本稿では、『嵯峨のかよひぢ』に見える藤原為家の涙について注目し、解釈を試みたい。作品論といえる程まとまった考察の用意はないが、為家、為氏、阿仏尼の関係、そして彼らを照射する雅有の意識を読み解きたいと考えている。

## 一 為家と為氏の確執

『嵯峨のかよひぢ』で、藤原為家は三度涙を流す。

文永六年九月十三日、飛鳥井雅有は小倉山に差し出た十三夜の月に興を得て、「かゝる所の今宵の月を、たゞなほざりに見んこと、いと口惜しかるべしとて」<sup>④</sup>と、弟の基長とともに、藤原為家の住む嵯峨中院山荘を訪れた。

阿部 真弓

①あるじ出で、悦ぶ。「昔は雲の上の光をのみ見習ひ侍りき。中比は葎の門にさし籠もり侍りしかども、猶情ある人、自ずから訪ひくる人侍りしに、今と成りては老を憎むにや、ことゝふ人もなくて、今宵も寂しく眺めて、一人侍りつるに、渡り給へるにこそ、更に昔恋しく思ひ出づる事おほくて、いとゞ留めがたき老の涙に、名高き光をさへやつし侍りぬる」とて、殊に興ぜらる。月百首の題を短冊に書き、もとより置かれたり。「もし訪ふ人も侍るとて、これをば用意して候ひつる。渡り給はずは、甲斐なからまし」とて、取出たり。

「老醜を厭いてか訪れる人もなく、一人寂しく月を眺めていた」と、為家は雅有たちの訪問を涙を流して喜び、準備していた月百首の探題詠を「女あるじ」の阿仏尼も交えて始める。その三日後、風情ある時雨の日に、雅有は「かしこの寂しき思ひやられて」、再び為家邸を訪れて『伊勢物語』の教えを請い、さらに『源氏物語』の講義を受けるとい話になる。

さて、翌日十七日より『源氏物語』の講義が始まり、夜は酒宴となる。講師を務め、その読み方をもつて雅有に新鮮な感興を催させた阿仏尼が、彼を御簾の傍に呼び寄せて、重代の歌人ふたりが『源氏物語』について談じることを絶賛し、為家までもが酔いも手伝つてか、感泣するのであった。

②女あるじ、簾のもとに呼び寄せて「此のあるじは、千載集の撰者の孫、新古今、新勅撰の撰者の子、続古今の撰者

也。客人は、同新古今撰者の孫、続古今の作者也。昔よりの哥人、かたみに小倉山の名高き住家に宿して、かやうの物語のやさしきことゝもいひて、心をやるさま、ありがたし。此の頃の世の人、さはあらじ」など「昔の人の心地こそすれ」など、やう／＼に色を添へていはる。男あるじ、情ある人の年老めれば、いとゞ酔ひさへ添ひて、涙落とす。

『源氏物語』の講義も順調に進み、十日程経った九月二十一日、為家の嫡男為氏が嵯峨中院山荘に來たとわざわざ連絡があり、雅有も為家邸を訪問する。

③入道の子の大納言為氏、有馬より返りて始めて來たりとて、消息あれば、行きぬ。「今日は騒がし」とて、殊更篝火の巻ばかりなり。あるじ方より、例の酒取り出でたり。連哥、殊に今日は上手添ひたれば、聞き所あり。あはれなる句ども出できて、老人などは酔ひ泣きす。

篝火の講義の後はいつものように酒宴となり、連歌まで始まるが、この日は普段と違って、連歌を得意とする為氏がいることでさらに座が盛り上がり、為家は酔いも回って、感涙に咽ぶのである。

当時、藤原為家は七十二歳。『嵯峨のかよひぢ』は、寂寞とした嵯峨中院山荘の有様から書き始められ、為家は、老いの寂しさを訴えたり、酔えば、ふとしたことで涙を落したりする老いた人として描かれている。

現在、①で為家の嘆く、嵯峨中院山荘の寂寥感は韜晦とする解釈がなされている。田淵句美子氏は、当時、嵯峨中院山荘は「文化サロン」として機能しており、「この中院邸でも、後年転居した北林邸でも、為家の最晩年に至るまで、為家は小さな歌会等を数多く催している」「月次の（毎月恒例の）連歌会を催していた」と指摘され、実際には「こと、ふ人もなく」という状況ではなかったことを看破された。<sup>③</sup>

客観的視点から判断すれば、おそらくそのとおりであろうと思われ、老いたとはいえ歌壇の重鎮であり、作歌活動も盛んに行っていた藤原為家が当時の歌人たちに等閑視されていたとは考えにくい。「いとゞ留めがたき老の涙に」も、確かにやや大仰な文飾と見て取れる。しかし、やはり同様に思い極まって感涙した場面②③をも合わせて読む時、長月の十三夜の月に誘われてやってきた雅有たちに吐露した心情は、為家にとつての「真実」ではなかったかと考えられるのである。本稿では、主に②③で流した為家の涙について検討し、私見を述べてみたい。

まず、先に③について考えたい。③は、御子左家の荘園譲渡の問題もあり、夙に注視されてきた場面の一つである。

為家、為氏、雅有が連歌に興じた九月二十八日から二ヶ月足らずの後、為氏に譲渡されていた越部下庄が悔い返され、阿仏尼の生んだ為相に譲られたことが、文永六年十一月十八日付融覚（為氏）悔返讓状及び同日付為氏去状によって明らかとなっている。奇しくもこの『源氏物語』講義のさなかに、御子左家

の荘園譲渡に関する手続きが行われていた、ということである。『嵯峨のかよひち』には、この十一月十八日、およびその前日の記事はなく、この時、為家が譲渡の問題に専念していたであろうことが窺われる。

荘園譲渡をめぐる、後に深刻化する為氏と為家・阿仏尼の不和という問題と絡めると、『嵯峨のかよひち』に記された為氏と為家たちの交流はいかにとらえられるか。それはこの作品の論点の一つでもあるが、たとえば「飛鳥井雅有日記全釈」（水川喜夫氏、風間書房、一九八五年）は、③の場面にある「有馬」の注の中で、為氏が「初めて（始めて）」来たという文辞に対し、

前年に権大納言を辞した気楽さか、病気のためか、暫く湯治に行っていたと思われる。「初めて」は、阿仏尼の所へ近づかない、というのではなく、帰洛して最初に、の意である。

という解釈を示し、その表現を為氏と為家・阿仏尼の関係とは結びつけない立場をとっている。また、御子左家の和歌文書・荘園の譲渡問題について綿密な考察を行った佐藤恒雄氏も、文永六年の手続きについては「円満裡にことは運んだ」として、

なお、これらの文書（稿者注 文永六年十一月十八日付融覚悔返讓状及び為氏去状を指す）が認められたのは、飛鳥井雅有に『源氏物語』を講義中のことで、十四日は早蕨、十九日には宿木の講義があった。間の十五日と十六日は、

雅有は自宅において終日なじみの白拍子と遊んでおり、十七日と十八日の記事はない。かくて『嵯峨のかよひ』の雅有の視点からは、為家のこのように差し迫った事情は全く窺えない。

とされ、田淵句美子氏も、

越部下庄については、円満に悔い返しが行われたのである。これはちょうど、『嵯峨のかよひ』で為家、雅有や為氏らの交遊が描かれている頃のことである。翌文永七年にも、為氏が嵯峨中院邸にしばしば通っていることは『為氏卿記』に見えるから、このころの為家と為氏の関係には、特に悪化の兆しは見えない。

と述べている。現在のところ、『嵯峨のかよひち』の時点では、為家・為氏父子の関係はまだ陰悪ではなかったとの見方が大勢を占めている。

しかし、為家がしたためた一連の譲状を読むと、すでに当時、必ずしも円満とはいえない関係であったことが看取される。

文永十年七月十三日付前藤大納言為氏宛融覚書状案には、

(前略) 年ごろ四十余年同宿の入道、家の中に候ひては、思ふ様のまつりごとし難く思ひ候ひけるやらん、六十の後、法師の家出で申し勧めて、あさましく候ひし時、父に突かせ給ひたりとて、世には不孝の義にて、出仕も叶ふまじき

様に聞え候ひし時……<sup>(8)</sup>

とあり、為氏が六十歳をすぎた為家に家を出るように勧告して、父親をあきれかえらせ、不孝者として世間の噂にもなったと記されている。

この出来事は、為家が六十歳になった正嘉元年(一二五七)よりも後、そして右引用の続きにある「思ひがけぬ姫宮」が誕生したと推測される文応元年(一二六〇)よりも前のことと考えられる。雅有が為家のもとに通うようになるおよそ十年前、為家と為氏の間には、後々遺恨を残す事件がすでに起こっていたということである。

また、『嵯峨のかよひち』の前年文永五年(一二六八)十二月に、為家は阿仏尼に、小阿射賀御厨の預所職と地頭職を譲与することとした。「播磨国細川庄地頭職関東裁許状」によれば、この荘園は、正元元年(一二五九)十月の時点では、領家職・預所職・地頭職ともに為氏に譲られることになっていた(領家職については、二条左大臣姫君に一期の間譲られ、その後為氏に返される)。しかし、その後、預所職・地頭職は為家乳母の孝弘母に一期の間権利が移され、さらに文永五年十二月十九日付阿仏御房宛融覚状によって、その死後は阿仏尼が譲り受けることとなった。阿仏尼没後には、預所職はその男為相に相伝してほしい旨も為家は書き添えている。

こうして、為家の意向によって、為氏は嫡男として約束された権利の一部を、阿仏尼・為相に奪われた。そしてさらに、文永六年十一月には、為氏より越部下庄が悔い返され、為相に譲

られることとなったのである。

文永五年の小阿射賀御厨の阿仏尼への譲与の段階で、為氏はかなり不服を感じていたらしく、「大納言にもよくよく申し認めて候ふ」（文永五年十二月十九日付阿仏御房宛融覚譲状）と、この譲与について、為家は為氏に念を押して言い渡す必要があった。「融覚が子孫として候はん者の、この事違へまゐらせ候はん時は、京鎌倉へも申して、領家職をも取らせ給ふべく候ふ」（同右）と、もし首尾よく事が進められない事態となれば、訴訟を起こし、為氏に権利がある領家職まで取り上げよとまで、阿仏尼にわざわざ書き残さねばならない状況が、すでに為家と為氏との間にあったのだった。

右の経緯を勘案すれば、続く翌年十一月十八日に悔返譲状と去状がしたためられるまでに、陰悪とはいえないまでも、両者の間にはすでに相当な確執が生じていたと考えるべきであろう。

さて、為家・為氏親子がこうした状況にあることを押さえた上で、あらためて③を読み直すと、前述の『飛鳥井雅有日記全釈』も注目する「初めて（始めて）」という言葉にはやはり違和感を覚えるのである。根拠を特に示されないまま、水川喜夫氏は「帰洛して最初に」という見解をとられたが、むしろ、当時の為家と為氏の関係を考え合わせ、為氏が有馬から帰ったのち嵯峨中院邸になかなか近づこうとしなかったことを反映した表現と解釈した方がよいのではないだろうか。越部下庄譲与の問題で、為氏が為家の意向を受け入れ、合意に達するにはやはり相応の時間が必要であり、この九月の時点ですでに、為家から越部下庄の権利に関する意向は示されていたはずである。自

分に不利益となる話し合いの場に臨みたくなひのは当然のことであらう。

雅有がこういう事情を詳細に知り得たか、また意図をもってここで「始めて」との言葉を用いたのか、というところまで考察を及ぼすことは難しい。しかし、「有馬より返りて始めて」という状況であったことは、為家がそのように伝えなければ雅有は知り得ない。その言葉をいかに雅有が理解したかはともかく、少なくとも、そこに、ようやく為氏が自邸を訪れたことに對する為家の意識を看取することに無理はないと考える。

「播磨国細川庄地頭職関東裁許状」によれば、正元元年十月、十二月、文応元年（一二六〇）七月に為家によって作成された三通の文書の段階では、吉富庄・小阿射賀御厨・細川庄、また藤原定家相伝和歌文書等は、期限付きで他者に一部譲られるにしても、そのほとんどが嫡男為氏に譲与されるものとして取りはからわれている。この時点で、ひとまず藤原為家は御子左家相伝の財産を次世代へ確実に受け渡す準備を整えたとみてよいだろう。

しかし、弘長三年（一二六三）、阿仏尼との間に為相が誕生し、状況も為家の意識も大きく変容していくこととなる。文永二年（一二六五）、為家は三歳になった為相に、授与奥書を書き加えた藤原定家自筆本三代集を与え、文永五年には阿仏尼・為相に莊園の譲与を約した。嫡男為氏を尊重する思いと、年老いて授かった為相を不憫に思う気持ちとの間で揺れ動き、何を、誰に伝えるべきか、為家は再び熟考を迫られることになってし

まう。

その渦中にて為家は、文永三年（一二六六）に父教定を亡くし、家督を受け継いだばかり、家業とする蹴鞠、和歌、そして学問の道にいかに向き合うべきか模索中の飛鳥井雅有と、奇しくも深い交流を結ぶことになったのだということを、ここでひとまず押さえておきたい。

では、為家の涙の意味を探るため、つづいて②について考察を試みよう。

## 二 為家の胸中

先述したように、②は『源氏物語』の講義の始まった九月十七日の夜の場面である。阿仏尼が雅有に向かつて、為家は『千載集』撰者俊成の孫、『新古今集』『新勅撰集』撰者定家の子で、自身は『続古今集』の撰者を務めた歌人であること、そして客人雅有は『新古今集』撰者飛鳥井雅経の孫で、『続古今集』入集の勅撰歌人であると言挙げし、「かやうの物語のやさしきことゝもいひて、心をやるさま、ありがたし。此の頃の世の人、さはあらじ」と、『源氏物語』を探究しようとする雅有の殊勝さを讀える。

この阿仏尼の言葉を読むとき稿者の脳裏に想起されるのが、この十年あまり後に阿仏尼が著すことになる『十六夜日記』の冒頭である。

「昔、壁の中より求め出でたりけむ書の名をば、今の世の人の子は、夢ばかりも、身の上の事とは知らざりけりな」と、『古

文孝経』の「孝」の意味も為氏は知らぬと非難した後、「さても又、集を撰ぶ人は例多かれども、二度勅を受けて、代々に聞え上げたる家は、類なほありがたくやありけむ」と、それぞれ二度も勅撰集を編んだ御子左家の父子、定家と為家を賞賛「その跡にしもたづさはりて、三人の男子ども、百千の歌の古反古どもを、いかなる縁にかありけむ、あづかり持たる」と、自分が亡き夫の意志を継ぎ、御子左家の財産を管理することの正統性を主張していく。流布本系に付された長歌にも、「君々の御言のままに 従ひて 和歌の浦路の 藻塩草 かき集めたる あと多し それが中にも 名をとめて 三代まで継ぎし人の子の 親の取りわき 譲りてし そのまことさへ ありながら」との箇所があり、俊成・定家・為家と三代に亘って稀代の歌人を輩出した御子左家への思い、そしてそれに連なる者として自分自身と為相を位置づけようとする強い意識を看取できるのだが、『嵯峨のかよひぢ』での阿仏尼の発言をみると、そうした意識と通底するものは、すでにその十年以上前には形成されていたことががわれる。

そうした認識のもと、②の「此の頃の世の人、さはあらじ」を読むとき、この雅有と対比的に非難される「此の頃の世の人」ははたして当世の世間一般の人という意味しか持たないのであるうかと考えてしまふのである。『十六夜日記』冒頭の「今の世の人の子」は、作品の背景や文脈により、為氏を婉曲的に表現したものと理解されているが、『嵯峨のかよひぢ』に記された「此の頃の世の人」も、為氏を示唆した言葉として解釈できる可能性はないだろうか、と。

森田兼吉氏は、『十六夜日記』冒頭について、「昔、壁の中より求め出でたりけむ書」、すなわち『古文孝経』が定家の『奥入』に引用されているところから、阿仏尼はここで「源氏学に必須の『古文孝経』の名を為氏は知らないといっていることになる」と鋭く指摘され、「定家から為家に承け継がれた和歌の道や源氏学の真の継承者であるという主張と自負が、はっきりと見えてくる」と冒頭の表現の根底にある、阿仏尼の意識を読み解かれた。

阿仏尼の言説は、為家没後、為氏との対立が激化したことによつて生み出されたものではあるが、古典研究の継承という点に留意すると、さらに『嵯峨のかよひぢ』の最後の場面、十一月二十八日条の為家の発言が注目されるのである。

已の時ばかりに行きて、古今廿巻を習ひ通して、奥書取りぬ。暮れぬれば例の酒あり。あるじの曰く「大納言、いまだこれ程詳しく受け通したることなし。いはんや源氏沙汰せず。又こと人、将かく細かに沙汰したる人、昔も今も聞かず。」有り難きよし、返すく色代せらる。

前日二十七日、『源氏物語』講義終了後、引き続き雅有は『古今集』の伝授を請い、翌日、その講読も終了する。「為氏にさえ『古今集』についてここまで詳しく伝授したことはない、まして『源氏物語』の講義などしたことがない」という為家の発言を言葉通りに受け取つてよいのか難しいところではあるが、為家に、御子左家嫡男である為氏に未だ伝授しおせていない

部分があるとの認識があつたことは読み取つてよいだろう。

源氏学継承の上で為家と為氏がこうした状況にあることを、当然、阿仏尼は知り得た。『嵯峨のかよひぢ』②の「此の頃の世の人、さはあらじ」という阿仏尼の発言は、「かやうの物語のやさしきことゝもいひて、心をやる」という機会を持つとせず、為家より未だ源氏学を継承せぬ為氏の御子左家嫡男としての資格を問い糾す含みがあるものと理解すべきではないだろう。

為家は阿仏尼の言葉を聞き、涙を流す。

雅有の『源氏物語』研究に対する熱意は、松原正子氏が指摘されたように、將軍宗尊親王に献上された『源氏物語絵巻』をもとする屏風絵の詞書をめぐつての論争で、屏風絵作成に関わつた雅有父教定が陳状に対する反駁をし終えぬまま世を去つてしまつたことに起因し、父の無念を晴らし、飛鳥井家の汚名をそぞぐことを悲願としていたことに拠ると考えられるが、その事情はおそらく為家も理解の上であつたろうと思われる。為家は、そうした使命感を持つて為家に向かう雅有の姿に、阿仏尼の前半の言葉同様、姻戚関係の上でも歌道の上においても、浅からぬ関係を持つ御子左家と飛鳥井家のつながりに感懷を覚えると同時に、彼女が示唆する、御子左家を継ぐ嫡男為氏とのぎこちない関係を想起せざるをえなかつたのではないか。

かつて、為氏に家を出るよう勧められる事件があつたとはいへ、為家の為氏に対する愛情や嫡男として尊重する思いは深く強いものであつたであろう。しかし、一方で為相を不憫に思う

気持ちには、次第に二人の関係の歪みを広げ、為氏の態度を冷やかかなものへと変化させ、為家に寂寥感を与えていくこととなる。雅有の古典研究への積極的な姿勢を褒め称える裏で、為氏に『古今集』『源氏物語』を確と伝授する機会を持ち得ぬまま、関係が悪化していくことへの悔恨の思いは深いものになっていたと考えられるのである。

雅有の熱意をうれしく思い、その志に心を打たれる一方、本当に為家が『源氏物語』の情趣についてじっくり語り合いたい相手とは嫡男為氏だった。こうした複雑な感情が、「情ある人」為家に涙を落とさせたのである。

さて、為家の涙という問題について、前節で検討した③を今一度振り返ってみよう。

この場面は『嵯峨のかよひぢ』の中で、為家・為氏・雅有が初めて一堂に会した場面でもある。雅有は為家に呼ばれるも、『源氏物語』の講義もそこに酒宴、連歌が始まるが、為氏に対する感情の揺れが大きくなっている為家は、為氏の秀句に感涙する。雅有は、その涙は酔いも手伝つてのことと解釈しているが、関係が悪化しつつある中、為氏がようやく顔をみせ、連歌に興じることができたことは、情愛厚い為家にとっては感慨深いものであり、涙は酒のせいだけではなかっただろう。

前節に引用した①の場面でも、為家は雅有たちの訪問に、昔を思い出して「老の涙」を流していた。前述のように客観的に見れば、当時、「こと、ふ人もなく」と嘆く程、人に忘れられたわけではなかったが、しかし、為家にとっては、九月十三夜

の風情ある名月に自分を思い出し、風流を好む人々が集わなければ、「こと、ふ人もなく」も同然としか思えなかったのだ。そのような折、雅有だけが、「か、る所の今宵の月を、たゞなほざりに見んこと、いと口惜しかるべしとて」、為家を慕い訪ねたのであるから、その喜びはひとしおであっただろう。「もし訪ふ人も待るとて、これをは用意して候ひつる」と、待つてましたとばかりに月百首を始めるが、しかし想像を逞しくすれば、この時、為家が心の底で訪問を待つていたのは為氏ではなかったか、ともに月を眺め、和歌を詠じたかったのは為氏ではなかったかと思われるのである。

だからこそ、為氏が帰京後初めて嵯峨に訪れた夜、「あはれなる句ども出でて、老人などは酔ひ泣き」した。息子とこのような夜を過ごすことができ、感涙に咽いだのである。

### 三 まとめ——雅有の視線——

『嵯峨のかよひぢ』の記事を見る限りであるが、この時期、雅有は、為家・為氏親子にとって一種の緩衝材のような役割も持つていたようだ。③で、為家は為氏の訪問をわざわざ連絡し、雅有を呼び寄せているが、十一月二日も、

中院より使ひあり。「浦よりをちに」とあり。「隔つるとはなきに」とて、すゞむし具して行く。もとより大納言ありて、酒飲みけり。少し遊びて、やがて帰らぬ。

と為家と呼ばれて、嵯峨中院山荘に行ったところ、すでに為氏がいた。時期的に、越部下庄の悔い返しに関する問題について最終的な調整を行っていた頃と考えられ、さすがに、この日はあまり酒宴が盛り上がることもなかったようだが、雅有は為家とも為氏とも、当時それぞれ親しい関係にあり、父子の気まづさを和らげる貴重な存在であった。

また、十一月二十六日には蹴鞠の会が催されているが、雅有がいるからこそ開催されたものであり、これに為氏、為世も参加して、親・子・孫が顔を合わせることもなかった。

この程に大納言入道、庭の座につく。顯文紗の衣に、無紋の煙草の下沓。次の座に大納言為氏。直衣に紫しぐらの下沓。<sup>かみひり</sup>冠かけ、紙捻り<sup>かみひねり</sup>。兵衛督為世、浮線綾<sup>ふせんれう</sup>の青裏の狩衣、薄色の相<sup>あひ</sup>、同じき指貫。足を馬に踏まれて、沓を履かず。

名人の証である無紋の煙草の下沓をつけた為家を筆頭に、御子左家三代が雅有の前に並ぶ。

雅有は為家の弟子として御子左家の人々を見つめ、日記を書き綴ってきたが、ここでは、すでに蹴鞠の家として名を上げている飛鳥井家の若き当主としての視点で、為氏、為世が為家の技を継承し、御子左家が今後、蹴鞠の家として確立していくか否かを見定めようとしている。本稿で論じてきたことをふり返れば、時に雅有は、歌道、源氏学の継承という意識のもとに、これと同様の視線を為家・為氏親子に注いでいたのではないだろうか。

諸氏が指摘されているように、『嵯峨のみやまち』の重要なテーマは、藤原為家から受けた『古今集』『伊勢物語』『源氏物語』の伝授の様相を綴り、古典学継承の正統性を示すところにあるが、それは、先に述べたように、父教定の急逝後、飛鳥井家の家業である、蹴鞠・和歌・学問をいかに盛り立てていくかという課題と不可分の問題であった。飛鳥井家の家業継承という意識から記された日記であるが、しかしその意識は翻って、伝授する側の御子左家の家業継承の問題を鋭く照射する作品としても描かれているのであった。

『嵯峨のかよひぢ』は小品ながら、未だ研究の余地がある作品であり、興味はつきない。本稿においては、藤原為家の流した涙に焦点を絞って検討を進めてきたが、未消化の部分もあり、考察の及ばない問題が多々あった。それらについては、今後の課題としたい。

## 注

- (1) 伝本には『嵯峨のかよひ』とあるが、雅有の日記は「路」という形式の題が多く、当日記の写本の題号にも「路歟年号虫損」という注記があるため、本稿はそれに従った。
- (2) 『嵯峨のかよひぢ』を含め、飛鳥井雅有の日記の成立やそれに関わる虚構性の問題に言及されたものには、近年では、河野有貴子氏、佐藤恒雄氏、佐藤智宏氏、渡辺静子氏等の論考がある。
- (3) 成立時期について、水川喜夫氏は「著作年月は不明。推定す

- れば、毎日ではないであろうが、心に留まる出来事は書き留め、「最上の河路」の旅（文永七年）に出るまでの間に纏めたのではなからうか」（飛鳥井雅有日記全釈）風間書房、一九八五年）とされ、河野有貴子氏は、「文永六年の記事内容に構成を加えて、文永七年の春か夏頃までに、『嵯峨の通ひ』は成立したと考えられる」（飛鳥井雅有「嵯峨の通ひ」の方法―事実の改変と成立時期について―）（広島女学院大学大学院 言語文化論叢）11、二〇〇八年）とされた。
- （4）『嵯峨のかよひち』の引用は、『中世日記紀行文学全評釈集成 第三卷 源家長日記 飛鳥井雅有卿記事 春のみやまち』（勉誠出版、二〇〇四年）による。
- （5）田淵句美子氏「人物叢書 新装版 阿仏尼」（吉川弘文館、二〇〇九年）。
- （6）佐藤恒雄氏『藤原為家研究』（笠間書院、二〇〇八年）。なお、本稿の御子左家所領および文書譲与に関する考察については、本書より多大な学恩を受けている。
- （7）田淵句美子氏前掲書。
- （8）以下、譲状の引用は、佐藤恒雄氏前掲書収録の校訂本文による。
- （9）『十六夜日記』冒頭および長歌の引用は、『新編日本古典文学全集48 中世日記紀行集』（小学館、一九九四年）による。
- （10）『十六夜日記』論―注釈の方法に触れつつ―」（『日本文学研究』20、一九八四年十一月。『日記文学の成立と展開』（笠間書院、一九九六年）に再掲。）
- （11）「飛鳥井雅有の研究―歌人・日記作者・古典学者としての生

涯―」（立教大学日本文学）14、一九六五年六月）。この問題については、『中世日記紀行文学全評釈集成 第三卷 源家長日記 飛鳥井雅有卿記事 春のみやまち』の『嵯峨のかよひち』第二節（評釈）にも要を得た説明がある。

（12）雅有の姉が為氏室（為世母）という関係であり、雅有と為世も『嵯峨のみやまち』の中で親しい様子を見せている。この二日後の十一月四日も、為氏は弟たちを連れ、突然、雅有邸を訪れて、酒を酌み交わしている。ただし後年、雅有と為氏・為世親子との間には確執が生じており、『春のみやまち』には、為氏、為世に対する批判的な文言も見られる。

（13）『中世日記紀行文学全評釈集成 第三卷 源家長日記 飛鳥井雅有卿記事 春のみやまち』の『嵯峨のかよひち』第四節（評釈）は、この蹴鞠会上鞠を務めた雅有が為氏に向かって蹴ったことについて、「蹴鞠の道において、雅有が為氏よりも秀れていることを印象づけようとしたものではなからうか」と解釈し、また、為氏が冠を「紙捻り」でとめていたことを記している点については、「これは蹴鞠の新しい装束であり、飛鳥井家の流儀にはないもの」で、「雅有の目から見れば、為氏の装束は批判すべきものと思われたのであろう」と指摘している。

（あべ まゆみ・本学教授）